

藤原儀兵衛著『マツタケ山づくりのすべて』

松雪 清人



現在森を育てる会では「マツタケ狩りのできる林」を究極の夢(?)として、新5カ年計画に沿ってアカマツ林の整備を行っています。ただ、実際にどういう整備をすればマツタケが生え

てくるのかは手探りの状況でした。そういう時に、たまたまマツタケ山づくりの実践的なノウハウを公開した本が出版されたことを知り、早速購入してもらいました。

著者は、昭和30年頃から50年間にわたってマツタケづくりを専業としたわが国最初と言ってもよい林業家で、現在まで高い自然観察力と地道で手厚い森林整備により現在も群を抜く生産量を誇っています。

本書では、まず「マツタケ山づくりへの途」と題して著者が歩んできたマツタケづくりの歴史や苦労話、トピックなどが語られています。そして後半では、私たちの作業にとっても役に立つ技術的ノウハウが、「技術編1：マツタケ発生の条件」、「技術編2：マツタケ発生の施業」としてわかりやすくまとめられています(表-1)。

表-1 本書の目次抜粋

技術編1 マツタケ発生の条件	技術編2 マツタケ発生の施業
マツタケとは—マツタケ菌と子実体の特徴	2. 柴かき
マツタケ菌の性質と特徴	柴かきの目的
マツタケの生理	腐植層(A層)を取り除く
1. シロ	柴かきの作業方法
菌糸の集まり	柴の堆積
シロの発達	柴かき作業を行う期
シロの管理	シロの合体を防ぐ
2. マツタケの発生と気象条件	3. 戻し柴
菌糸成長の最適温度は20—23℃	シロの堆肥—戻し柴
地温条件と降水量	4. 下層木の除伐・枝打ち
地温19℃でスイッチが入る	除伐の目的
3. アカマツ林の林齢とマツタケの発生	伐る木、残す木
アカマツ林ときこの関係	ソゴの手入れ
林齢80年が限界	除伐の作業方法・時期
4. マツタケ山の適地	5. アカマツの間伐
マツタケの発生しやすい場所	間伐の目安
日光が適度に当たる林況	伐る木
	伐倒木の搬出

その中で、特に印象に残ったマツタケ山整備に関する知見についてまとめてみます。なお、本書の施業地は長野県伊那地方であり、気候・気象条件が福岡市とは異なっていることを念頭に置いておく必要があります。

1) マツタケは林齢25年頃(密度1本/3m²程度)から生え始め、30～60年頃(密度1本/5～15m²程度)が最盛期となる(表-2)。なお、表中の「シロ」とは、土壌の浅い部分にできるホトケキ状の菌糸の集まりで、マツタケの母胎となるものである(図-1)。

表-2 マツの林齢とマツタケの発生状況

マツの林齢	密度の目安	シロの状態	子実体の発生
20年	4000本/ha	シロの形成が始まる	
25年	3000本/ha	シロの数が増大	マツタケの発生が始まる
30年	2000本/ha	シロが活発に形成	マツタケの発生量が増える
40年	1000本/ha	シロの形成、成長が増大	発生最盛期
50年	800本/ha	シロの巨大化	発生最盛期
65年	600本/ha	シロの一部が崩れ始める	発生量が減少
70年	400本/ha	シロが点状に変化	急激に発生量が減少
80年		シロの崩壊	発生が止まる

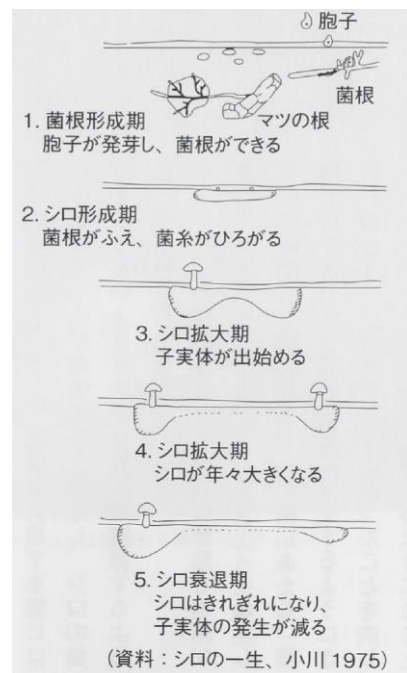


図-1 シロの一生

- 2) マツタケ山に向いているのは、東から南向きでの尾根筋で、腐植層がほとんどないあるいは薄い山である(表-3)。

表-3 マツタケ山に向いている場所

調査項目	適地のポイント
1 マツの林齢	20～50年
2 斜面の向き	東から南向き(西もよいが、下層木を多く置くこと)
3 地形	尾根筋、凸地形など水はけのよい地形
4 地質	花崗岩質、礫質、砂岩質、粘土質など。 アルカリ土壌はダメ
5 腐植層の厚み	ほとんどない、または薄い
6 マツタケと同時期に発生するきのこ	ホンシメジ、シロシメジ、キシメジ、カキシメジ、クロカワなど
7 シロの有無	
8 マツタケ発生の有無	

- 3) マツタケに適した林型としては、上層をアカマツが占め、中～低層を中低かん木や草本が適度に生育している二段林が良い。

- 4) 地掻きは林齢が若い間是有機物や腐植物の多い層(A層)を取り除く必要がある(特に若齢期)が、最盛期にはA層を少し残す程度(1回/5年程度)とするのが良い(図-2・表-3)。

表-3 マツの林齢と芝かき(地掻き)の関係

マツの林齢	シロ	芝かきの程度
10年		完全にA層を取り除く
20年	シロ形成期	完全にA層を取り除く
30年	シロ増大期	A層を少し残す程度にまで除去、ケロウジの除去
40年	シロ増大期	A層を少し残す程度にまで除去、ケロウジの除去
50年	シロ増大期	A層を少し残す程度にまで除去、ケロウジの除去
60年	シロ増大期	A層を少し残す程度にまで除去、ケロウジの除去
70年	シロ点状期	芝かき中止
80年	シロ消滅期	

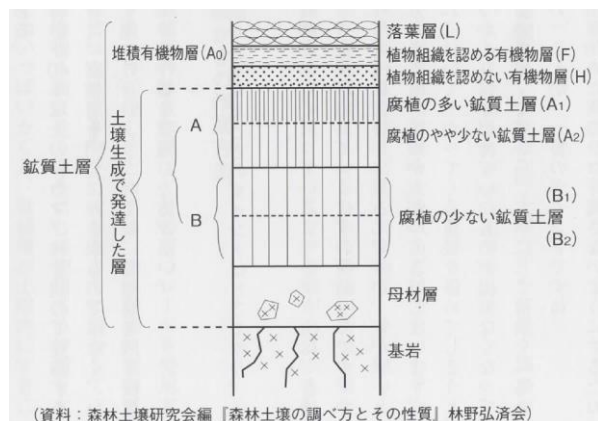


図-2 土壌断面の層位の模式図

- 5) 下層木の除伐は、残す木と伐るべき木とを考えてする必要がある(表-4)。特にソヨゴはマツタケ菌と相性が良いので残すべきである。その場合、背丈程度まで枝打ちをして、何年かしてある程度まで上に伸びたら頭を止めるのが良い。また、シュンランはマツタケの出やすいことを示す指標植物となる。

表-4 アカマツ林で残す木と伐る木

除伐の対象となる木	クリ、クロモジ、五葉松、ホオノキ、カラマツ、コシアブラ
残したい木	ネズミサシ、ネジキ、ソヨゴ、ヤマボウシ、ナラ、ミズメ、シラカバ

- 6) 樹齢20年に満たない若齢林では、枯損木以外は伐らずに自然淘汰されるものだけを除くようにする。また、20年を超える林では、1本/3.3m²程度の中庸仕立てにするのが良いとされている。

- 7) マツタケが出る見込みのないアカマツ林は皆伐して、生命力の強い実生で自然更新させるのが良い。

以上の知見を参考に我々のアカマツ林を見てみると、腐葉土が少なくほどほどの陽当たりになっているA地区がマツタケが最も出やすい環境に近いように思えます。したがって、現状の環境を保つ形での整備、具体的には程よい地掻きや日照を著しく遮る中・下層木の除伐程度で留めておくのが良いのではないのでしょうか。一方で、ほとんど照葉樹林になっていると言ってもよいC～F地区は、広葉樹の積極的な伐採及び腐植土等の除去等によるアカマツの実生更新から始めるのが適当ではないかと思います。

最後に、著者がまえがきの中で語っている言葉で本書の紹介を終えたいと思います。

「いま、多くの里山や山林が放置され、荒れ果ててしまっている。この山にマツタケと言う付加価値を付ければ、だれも里山や山林を負の財産などとは言わなくなるであろう。努力は必ず報われるものである。いずれ必ずと信じ、皆で里山を整備し、マツタケの採れる宝の山に変身させようではないか。」